

## JACET 関西支部 2005 年度秋季大会 ワークショップ・研究発表・実践報告・シンポジウム要旨

### ワークショップ1 「よりよい大学授業のために―「授業学」を考えるⅡ」

発表者： 高橋寿夫（関西大学）

笹井悦子（桃山学院大学・非常勤）

東郷多津（京都ノートルダム女子大学）

野村和宏（神戸市外国語大学）

本ワークショップは、昨年結成された授業学研究委員会の取り組みをもとにシリーズ形式で行われ、大学英語教育のさらなる向上や改善を目指し、議論することを目的とする。今回は、教師側アンケート、授業分析、そして成績評価の側面から“授業”について多角的に報告し、参会の皆様との活発な意見交換を行いたい。

春季大会において、当委員会は学生を対象としたアンケート調査の回答結果に基づき、学生の視点から英語の「よい授業」、「わるい授業」の特徴について分析し報告を行った。今回は英語授業担当者を対象にしたアンケート調査の結果を、学生アンケートで行った方法に準じていくつかの項目に分類し、教師が考える「よい授業」の特徴や、授業をよりよくする上での問題点について報告を行う。さらに学生の視点と比較し、どのような相違があるのか、そして、どうしてそのような相違が生じるのかについて考察する。

次に、実際に行われた大学の英語の授業（「スピーチ・コミュニケーション（中級レベル）」：受講生18名）を取り上げ考察する。考察にはビデオ録画を用い、たとえば、質問に答えられなかった学生に対する教師の指導が、当該学生に効果的に働いているか、あるいは他の学生にどのような影響を与えているかなどの具体的な事象を、授業中の行為や発話データの中から分析する。

また同時に、教師アンケートで扱った「よい授業」、「わるい授業」の各項目と授業分析の結果との関連性についても考察を試みる。

最後に授業における成績評価とそのフィードバックについて検討する。シラバス等で各授業科目の目標、評価方法を明示しても、学生への成績通知そのものは全ての授業が終わってから行われることが多い。しかし学習の途中段階で 達成度や学習不足を知らせることにより、学生に新たなインセンティブを与え、積極的な授業参加を促すことができる。より望まし

い形で到達目標へ導くために授業のトータルデザインに組み込んだ評価とフィードバックの実践について報告する。

### ワークショップ2 「「音声」を生かした効果的なリーディング指導を探る」

発表者： 氏木道人（関西外国語大学短期大学部）

倉本充子（広島国際大学）

伊藤佳世子（関西学院大学・非常勤）

西田晴美（関西外国語大学・非常勤）

本ワークショップでは、近年注目されている「シャドーイング」や「音読」の指導を取り上げ、それらの指導がリーディング力の育成に与える効果および授業への効果的な応用可能性を探る。また、「音声」という観点を含んだリーディング指導の実践例の紹介を中心に議論を進める。

まず、理論的背景について述べる。リーディング研究会がこれまで取り組んできた「読解の認知処理過程」について説明し、音声の利用がリーディング力向上になぜ必要であるか、理論的説明と過去の実証データ等に基づき考察する。特に初級学習者にはボトムアップ処理能力の自動化促進が不可欠である点を強調する。また、実践への橋渡しとして、音声を利用したリーディング指導には、「シャドーイング」、「音読」やそのバリエーションである「テキスト呈示のシャドーイング」などさまざまな指導法が考えられるが、これらにはどのような処理過程の違いがあり、各々がどのような力を育成しようとするのかを認知処理の観点から考察する。

次に、音声を利用した音読指導のデモンストレーションを行う。ここでは、1) シャドーイング（テキスト呈示なしで、音声のみを聞きながら声に出して読む）、2) テキスト呈示のシャドーイング（テキストを見ながら、音声を聞いて声に出して読む）、3) 音読（テキストを見るが音声を開かずに読む）の3つの指導法を紹介する。各々の指導について実践経験のある発表者らが約15分のデモンストレーションを行い、会場の方に授業を体験していただく。また、実際の指導経験から学生の反応、問題点、利点、データによる評価等の説明を加え、議論の内容を広げたい。

本ワークショップでは、理論的背景の説明と実証データの紹介に終始することなく、指導実践例を実演しながら、会場の先生方とのインタラクションおよびディスカッションを行う予定である。また、ボトムアップ処理を高める

ことを意図した同様の指導やその他の教授法を実践されておられる先生方と共に、指導法改善についても議論したい。

## 研究発表 1-1 ペーパーバックと映画の併用学習後の読解方略とリーディング不安の変化

松田早恵（摂南大学）

### 1. はじめに

現在の学習方略研究は多岐に渡り、それが様々な教授法にも反映されている。学習方略の明示的な指導が効果を上げた例も多数報告されているが、本研究では読解方略に焦点を当て、明示的な指導なしに読解方略使用に変化が起きるかどうかを調査した。

### 2. 研究の目的

- 1) 読解方略の明示的な指導を行わず、半期間でペーパーバックを一冊読み切ることを目標にした場合、学期前と後では読解方略に変化は見られるか。
- 2) 外国語(英語)リーディング不安に変化が見られるか。

### 3. 方法

#### 3.1 参加者

国際言語文化学部 1 年生 基礎ゼミナール(秋学期)の学生 12 名(男 6 名女 6 名)

#### 3.2 教材

ペーパーバック *Charlie and the Chocolate Factory* Roald Dahl 著 (Puffin Books)

映画 *Willy Wonka & the Chocolate Factory* (1971) Mel Stuart 監督 (Warner Brothers)

#### 3.3 データ収集

- ① 学生の読書習慣や経験を問う質問紙
- ② 読解方略に関する質問紙(学期初めと学期末)
- ③ 外国語(英語)リーディング不安に関する質問紙(学期初めと学期末)
- ④ コース(授業)評価に関する質問紙

### 4. 結果

実際に各学生が読んだ量にはばらつきがあり、100%読破を徹底させることはできなかった。しかし、読解方略に関しては、一語一句読みや読み返しが減り、背景知識や情報の有効利用が増えるなどの変化が見られた。また、リーディング不安の調査からも、「一語一句を日本語に訳してしまう」ことが減った一方で、読むことの大変さや楽しさや、英語圏の歴史文化を知

る必要性をより強く感じたことがわかった。

### 5. 考察とまとめ

今回明示的な読解方略指導はしなかったが、学生は「小説を読む」ことに合わせて読解方略を変化させた。特に、「次にどのような内容が来るかを予想しながら読み進めていく」点に変化が最も顕著に現れた。

主な参考文献

竹内理(2003)『よりよい外国語学習法を求めて』松柏社

Krashen, S. (2004). *The Power of Reading – Insights from the Research*. Libraries Unlimited Inc.

Saito, Y., Garza, T., & Horwitz, E. (1999). Foreign language reading anxiety. *Modern Language Journal*, 83 (2), 202-218.

## 研究発表 1-2 リーディング指導におけるタスクタイプとその評価の情意への影響

高橋昌由（大阪府立山田高等学校）

### 目 的

授業のみならず宿題などの自己学習で生徒の「やる気をおこさせるであろうリーディングタスク」(タスクを「質問形式」ととらえ、taskivityと呼ぶことにする)とその評価に関して、個人差にも着目しつつ、情意への影響を考究する。

### 背 景

本研究は、リーディング指導の具体的方法としてtaskivityが課されることを視座に、生徒に英語への好感をもたせ、学習に向わせるには、どのようなtaskivityを課することが効果的であるかを考えるところから緒についた。

### 方 法

- ① 高校生に30種類の taskivity を課して、それぞれがどのような情意(「問題に興味をもてたか」、「解きやすかったか」など)へ影響しているかについて、質問紙法で調査した。
- ② taskivity に取り組み、それに対するさまざまな「評価」の方法による情意への影響を質問紙法で調査した。
- ③ taskivity と評価に関して、個々の学習者の学習への態度による違いについて調査した。

### 結 果

「方法」に示した3項目について、①に関しては、それぞれの尺度の平均値と比較した場合、taskivity に対するさまざまな反応が見られた。②および③においても同様に、さまざまな反応が見られた。データは発表

で示す。

## 結 論

「やる気をおこさせるであろうリーディングタスク」が特定され、評価に関しても看過できぬ結果が得られた。また、taskivity と評価に関して個人差に着目した場合にも興味深い結果が得られた。これらの結果から、教師は学習者を分析した上で、効果的なtaskivity やその評価方法を決定することで、授業や宿題などの自己学習を成功に導きうるであろうと考える。

## 実践報告 1-3 ヴィジュアル・イメージを用いた現在完了形指導の CALL 教材の有効性に関するアンケート調査

森永弘司（同志社大学嘱託講師）

近年英文法をビジュアル・イメージによって理解させようとする試みがかかり活発におこなわれている。今回の発表では、ビジュアル・イメージを使用した文法指導の一案として、金太郎飴を用いた現在完了指導法をCALL教材化(英語で作成)して指導したときのアンケート調査の結果を報告したいと思う。

### 1. 被験者

大学の法学、経済、経営、理工、情報理工学部1年生、198名。

### 2. CALL 教材の内容

- ① Flash による金太郎飴のイメージを用いた現在完了指導法
- ② 現在完了を理解させるための4種類の練習問題(正答、誤答の説明付)

Multiple Choices

Multiple Select

Alternate

Mixed Sentence

- ③ リスニングのクローズ・テスト

現在完了の助動詞の have が主語と結びついて短縮形になったときの音声変化に慣れさせることをねらったもの

### 3. アンケート調査紙の内容

- (1) 金太郎飴のアニメーションによる現在完了指導法を、今までに習った現在完了指導と比較して、①非常にわかりやすい、②かなりわかり易い、③少しわかり易い、④どちらともいえない、⑤少しわかり難い、⑥かなりわかり難い、⑦非常にわかりにくい、までの7段階の評価でどれに該当するか
- (2) 4つの練習問題のうち、現在完了の用法を理解するうえでど

の問題が一番有効か

- (3) 全ての設問に付けた正答、誤答の説明が、現在完了を理解するうえで、①非常に役立つ、②かなり役立つ、③少し役立つ、④どちらともいえない、⑤どちらかといえば役に立たない、⑥ほとんど役に立たない、⑦全く役に立たない、までの7段階の評価でどれに該当するか
- (4) カーペンターズのリスニングのクローズ・テストは、この教材に、①必要、②どちらともいえない、③不要か、についての評価

### 4. アンケートの結果と考察

- (1) ① 12名 ② 22名 ③ 68名 ④ 57名 ⑤ 28名 ⑥ 11名 ⑦ 1名
- (2) Multiple Choices 55, Multiple Select 33, Alternate 18, Mixed Sentence 20, 全て役に立つ 74, 全て役に立たない 2
- (3) ① 32名 ② 63名 ③ 66名 ④ 27名 ⑤ 4名 ⑥ 2名 ⑦ 0名
- (4) ① 75名 ② 80名 ③ 22名

上記の結果から、若干ではあるがビジュアル・イメージによる指導法の方が理解しやすいことが裏付けられた。

### 参考文献

ジオス(2002)『ネイティブの例文でわかる英文法』東京:ジオス

大西泰斗・ポール・マクベイ (1999)『ネイティブスピーカーの英文法』

## 研究発表 2-1 中央実行系課題と英文・空間記憶域の関連 — 日本人英語学習者における心理言語学実験

中西 弘（関西学院大学大学院生）

ワーキングメモリ(WM)は、処理と保持の同時進行を可能にする認知システムで、リーディング・リスニングの際にもWMの働きが必須である。

Baddeley(2000)のWMモデルでは、音韻ループ・視空間スケッチパッドの従属システムに加え、上位機構として中央実行系(CE)を想定している。従属システムはそれぞれ別々の領域で情報を保持していることが仮定されている(Shah and Miyake,1996)。

一方、全体統括システムのCEは、音韻ループ、視空間スケッチパッドに領域汎用的に関与していることが示唆されている。CE課題のハノイの塔(TOH)、N-back課題と言語・空間課題の間に、いずれも有意な相関が見られたことがその根拠とされる(Miyake et al 2001)。

日本人英語学習者においても、CEは言語・空間課題に領域汎用的に関わるのであろうか。CE課題としてTOHとN-back課題を用い、また、ス

パン課題としてリーディングスパンテスト(RST)・リスニングスパンテスト(LST)・空間スパンテスト(SST)を用いて、CE 課題・言語・空間課題の関係を調査した。

現在、被験者は大学生・院生 30 名で、実験の結果、CE 課題と SST の間に有意な相関が見られ、L1 研究と一致したが、CE 課題と RST・LST 間での相関は見られず、L1 研究と異なった。

この理由を考察に加えた。文の理解は、記号(言語)処理の段階と、概念処理の段階に分かれている(Levitt,1993)。L2 は L1 を習得後学習される為、L1 と同じ概念処理を適用していると考えられる。今回行った CE 課題は非言語課題であった。L1 では、RST・LST において記号(言語)処理が自動化され、多くの認知資源を費やす必要が無い。概念処理に認知資源を配分出来たので、非言語課題の CE 課題と関連があったと考えられる。一方、L2 では、言語処理が自動化されておらず、ほとんどの資源を記号(言語)処理に割り当てた為、概念処理に認知資源を回せず、非言語課題の CE 課題と関連がなかったと考えられる。

今回の結果では、L2WM において特質が現れた。L1 と違い、L2 では言語処理の自動化がなされていないことがその要因して挙げられ、英語教育への示唆となるのではないかと考えられる。

#### 参考文献

- Baddeley, A.D. (2000) The episodic buffer; a new component of working memory? *Trends in Cognitive Science*, 4, 11, 417-423.
- Shah,P., and Miyake,A. (1996). The separability of working memory resources for spatial thinking and language processing: An individual differences approach. *Journal of Experimental Psychology: General*, 125, 4-27.
- Miyake, A., Friedman, P., Rettinger, A., Shah, M., and Hegarty, M. (2001) How are visuospatial working memory, executive functioning, and spatial abilities related? A latent-variable analysis, *Journal of Experimental Psychology: General*, 130, 4, 621-640.

## 研究発表 2-2 ティームティーチングに対する教師の意識に関する研究

中島正恭 (京都府八幡市立男山東中学校)

日本人英語教師と AET とのティームティーチングは生徒のコミュニケーション能力向上の有効な手段として、中・高校を中心に実施されている。また近年、小学校でも英語活動の導入に伴い、この指導形態が広く採用さ

れてきている。この研究のねらいは、小学校で英語を指導している教師、中学校英語教師、AET の3者に22項目のアンケート調査を行い、ティームティーチングに関して3者の間に意識の違いがあるかを明らかにすることである。

小学校教師48人、中学校英語教師46人、AET44人にアンケート調査を行い、その結果から、因子分析によって5つの因子を導き出した。第一因子はコミュニケーションや異文化理解に関する指導。第二因子は AET 導入の効果。第三因子は AET の日本語能力。第四因子はティームティーチング教材の不足。第五因子はティームティーチング制度の拡大発展。さらに3者の間での意識の差をより明らかにするために、因子得点を求め一元配置分散分析と多重比較を行った。その結果、第一因子では AET が一番高く、2番目に中学校教師、最後に小学校教師と続き、3者の間に有意な差が見られた。第二因子では小学校教師と AET、中学校教師と AET の間に有意な差があった。第三因子では3者の間に有意な差が見られた。第四因子では小学校教師と AET、中学校教師と AET の間に有意な差があった。第五因子では中学校教師は小学校教師より高い結果を示していた。

以上の結果から導き出されることは、次の5点である。第1に、AET が一番強くコミュニケーション能力の育成や異文化理解の指導が重要だと考えている。2点目として、小・中学校教師は AET に比べティームティーチングは効果のある指導法であると考えている。3点目は、AET の日本語能力に関して、小学校教師が一番強く必要だと考え、中学校教師はあまり重視していない。4点目は、小・中学校教師はティームティーチングの教材作りや準備時間の確保に課題があると考えている。最後に、ティームティーチングが今後さらに継続発展してほしいと願っているのは中学校教師が一番強く、小学校教師はこの考えに否定的である。

## 研究発表 2-3 What is the Role of Materials?: Applying Soft Systems Methodology (SSM) to Materials Development

マスワナ紗矢子 (京都大学大学院生)

Unlike elementary and secondary education, textbooks used at the tertiary level are not directly subject to Ministry of Education screening. This simple fact may be reflected in the difficulty of selecting appropriate materials. Teachers seem to choose materials from their experiences and intuition. Although several studies offer materials evaluation tool, they fail to

accommodate voices of the stakeholders other than teachers. This lack of guidelines in materials selection might be considered as one of the reasons attributed to little institutional improvement in English education. Thus, this study aimed to examine the expected roles of materials from all parties concerned and compare them to the current materials in use, so that it may provide teachers with criteria in selecting materials.

The present study employed Soft Systems Methodology (SSM) which has been developed mainly in management studies. SSM has the advantage of integrating all different perspectives from concerned people, such as learners, teachers, and institutions, and suggesting actions to improve the situation by comparing the real-world and conceptual systems (e.g., Chambers, 1997; Tajino et al., 2005). The data obtained from evaluation of 16 materials used for reading/writing courses at a national university were analyzed by using a revised version of Chambers (1997) evaluation formula. The new formula included evaluation items for methodology and vocabulary from a SSM perspective. The qualitative data through interviews were also discussed.

The results of the study include: 1) most materials were content-based rather than skill-based, possibly leaving out the students who are not interested in the topics of the materials; and 2) only a third of the words from Academic Words List (Coxhead, 2000) were used in the materials surveyed. The materials were either too general or too specific for the course defined as English for General Academic Purposes (EGAP).

From these findings, it is possible to argue that 1) more emphasis on language skills could complement the difficulty of finding a topic that appeals to every student, and 2) EGAP materials need to be balanced between English for General Purposes and English for Specific Academic Purposes. It is demonstrated that SSM has come to offer suggestions what to consider in selecting materials by incorporating different needs from the three parties and implies its applicability to materials development.

## References

- Chambers, F. (1997). Seeking consensus in coursebook evaluation. *ELT Journal* 51/1, pp. 29-35.
- Coxhead, A. (2000). A New Academic Word List. *TESOL Quarterly* 34/2, pp. 213-238.
- Tajino, A., James, R., and Kijima, K. (2005). Beyond needs analysis: soft

systems methodology for meaningful collaboration in EAP course design.

*Journal of English for Academic Purposes* 4/1, pp. 27-42.

## 研究発表 3-1 句動詞 V-out Construction の意味成立に関する一考察

青木真喜子 (フリー・在宅翻訳)

句動詞 (phrasal verb) または VPC (verb-particle construction) と呼ばれる構文 (例 *pick out* や *figure out*) は恣意的で特異現象だとみなされてきた。その理由は、伝統的な統語現象の記述による説明が主流だったところに要因があるように思われる。しかし Lindner (1983) らによる認知フレームが提示され、空間認知に関連した分析が可能になった。本発表では、Tyler and Evans (2003) や Croft (2001) らの知見を取り入れ、V-out Construction の意味成立・調節 (semantic accommodation) のメカニズムを筆者独自のスタイルで考察する。研究対象とするのは *figure out* である。

認知言語学において重要なカテゴリーの TR-LM (trajectory 対 landmark) という関係において、認知主体 (conceptualizer) の視線により文の意味が分かれる。例えば *The sun is out* (出現) と *The light is out* (消失)。両者の *out* を含む文の意味の違いは観察者の視線の違いによるものと考えられる。すなわち TR の出現が visibility に反映される一方で、TR が視界の外に出るために invisible になる。一方 *figure out* においても、その *out* がもつ意味の一つは visibility に対応する。すなわち seeing/knowing に対応する。よって *out* そのものに人間の認知能力による意味が写像されるのではない。そこに calculating/thinking を意味する動詞 *figure* の意味が貼付けられ、句動詞 *figure out* の意味 (seeing by thinking) が創発する。つまり、lexical verb と particle の統語的/意味的合体である。そこには化学反応に似た相互作用があり、proto-scene を越えた意味の拡張がみられるがメタファーや言語外要素も意味の責任に関与すると考察する。

引用文献:

- Croft, Williams. 2001. *Radical Construction Grammar*. NY: Oxford Univ. Press.
- Lindner, S. 1981. "A Lexico-semantic Analysis of English verb-particle constructions with UP and OUT." Ph.D dissertation, University of California, San Diego.
- Tyler and Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge Univ. Press.

## 研究発表 3-2 大学生の外国語語彙知識の減少について

### — 事例研究

岡本真由美（摂南大学・非常勤）

仕事で英語が使える人材の育成は大学英語教育の目標であり、また、英語運用能力の中核をなすものは語彙知識といわれている。一般に大学生の英語知識は大学受験をピークとし、その後低下傾向にあると言われるが、いまだ充分な調査は行われていない。以上のことから、本研究は大学生の語彙知識を 3 つの側面（広さ、深さ、語の使用）から経時的に調査することを目的とする。

調査には 3 つのテストとアンケートを使用した。受容語彙テストには Vocabulary Levels Test (Schmitt, 2001) を、産出語彙テストには Lex30 (Meara & Fitzpatrick, 2000) を採用し、それぞれ時間的制限のためオリジナルの 3 分の 1 サイズに修正した。また、コロケーションテストはケンブリッジ英検 CAE (O'Connell, 1999) より抜粋し作成した。調査は 5 月、7 月、10 月の 3 期に渡り、京都大学 1,2 回生の平均 283 人を対象として実施した。

テストの結果、以下の 4 つの点が考察された。第 1 に被験者は平均 5,895 語の比較的に広い受容語彙知識をもっているが、そのうちのごく限られた範囲を産出語彙として使用していると考えられる。第 2 に、コロケーションテストの平均は著しく低く、被験者の語彙ネットワークは乏しいと推測される。第 3 に、第 1 期から第 3 期にかけて、受容語彙は 25%、コロケーション知識は 41%、産出語彙は 15% の減少をみた。第 4 に、語彙知識の著しい減少は乏しい語ネットワークが一因ではないかと推測される。

本研究は大学生の語彙知識を 3 つの側面から動態として捉え、その著しい減少を報告するものであり、今後のカリキュラム、シラバス、教材開発のための参考資料として提示したい。

### 引用文献

- Meara, P. & Fitzpatrick, T. (2000). Lex 30: an improved method of assessing productive vocabulary in an L2. *System*, 28, 19-30.
- Schmitt, N. (2001). Developing and exploring the behaviour of two new versions of the Vocabulary Levels Test. *Language Testing*, 18(1), 55-88.
- O'Connell, S. (1999). *Focus on Advanced English: C. A. E. practice tests with guidance*. Essex: Pearson Education Limited.

## 研究発表 3-3 日本人英語学習者における英語後置修飾の難易度

平井 愛（神戸大学大学院生）

橋本健一（クィーンズランド大学大学院生）

### 目的

本研究は日本語を母語とする英語学習者にとって、どの後置修飾構造の難易度が高いのか、また処理が困難であるかを調査するためにオンライン実験を行う。本研究結果を基に、後置修飾構造の導入順序を考察する。

### 背景

日本語を母語とする英語学習者にとって、関係節は最も学習困難な構造の一つである(Nakamori, 2002)。6 年以上の英語学習経験のある大学生にとっても、文章読解やリスニングなどにおいて、理解が困難な構造の一つであると考えられる。

関係節に関して、様々な分野からのアプローチがあり多数の研究が行われている。これらは関係節の難易度の仮説と合わせて論じられることが多い。難易度に対する仮説は言語学的な有標性からのアプローチや、言語処理の観点からのアプローチなど多くの仮説がたてられているが、特に第二言語習得研究において、頻繁に引用される代表的なものとして、Keenan & Comrie (1977) の Accessibility Hierarchy (AH) 及び、Kuno (1974) の Perceptual Difficulty Hypothesis (PDH) があげられるだろう。

これらの仮説の検証は第二言語習得研究の枠組の中で行われているが、ある習得段階での第二言語学習者がどこまで習得が出来ているかということが論じられるのみで、どの構造が、より処理が難しいのかを論じる研究は数少ない。

また、関係節のみではなく、いわゆる分詞修飾や接触節を含む後置修飾構造全体の難易度を研究したものは、Hashimoto (in press) などがあるのみである。

本研究では、オンライン実験を行い、日本人英語学習者にとって、どの後置修飾構造の処理が困難であるかを明らかにすることを目的とする。

### 方法

Super Lab を用いた Self-paced Reading Task を行い、reading time と理解度テストの結果から、どの文構造がオンラインでの文理解において、困難であるかを調査する。

### 結論

理解度テストの結果を、正答を1、誤答を0と置き換えて分散分析を行った。結果、以下のような難易度の差があることが分かった。

OPA, SPA, OS, OPR, SPR, SS/OO/OC > SO, SC

(平均高)

(平均低)

中央埋め込み文となるタイプは正答率が有意に低かった。それに対し、分詞修飾タイプは有意差がみられなかったものの比較的正答率が高かった。また、接触節タイプは差がなかったものの他構造と比較すると、正答率が低かった。

## 引用文献

Hashimoto, K. (in press). English Postmodification for Japanese EFL Learners.

Keenan, E. L., & Comrie, B. (1977). Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8/1, 63-99.

Kuno, S. (1974). The position of relative clauses and conjunctions. *Linguistic Inquiry*, 5, 117-136.

Nakamori, T. (2002). Teaching relative clauses: how to handle a bitter lemon for Japanese learners and English teachers. *ELT Journal*, 56/1, 29-40.

## シンポジウム 「文学してますか？—大学英語教育に文学教材は必要なくなったのか」

**Moderator : 豊田昌倫 (関西外国語大学)**

**Panelists : 斉藤兆史氏 (東京大学)**

**若島 正氏 (京都大学)**

今回のシンポジウムのキーワードは、「文学」「教材」「大学英語教育」です。日本の英語教育では、文学教材の占める割合が一貫して減少してきました。また、近年の大学英語教育、とりわけ全学共通科目としての一般英語においては、その傾向が顕著に現れています。

こうした現状に鑑み、「文学」とはいったい何か、どのような「文学」作品を通して、何を教えることができるのか、どう教材化することができるのか、といった、日頃私たちがもやもやしている部分にすくくメスを入れ、大学英語教育に携わる私たちの授業実践を具体的に考える機会にしたいと考えています。

パネリストには、お一人は、2004 年にはご著書『乱視読者の英米短篇講義』(研究社)で第 55 回読売文学賞随筆・紀行賞を受賞された若島 正

氏(京都大学大学院文学研究科教授)、もうお一人は、大学における英語と英語文学が専門化していくなか、どのような教育・学習が求められているのかというテーマに切り込んだ『英語の教え方学び方』(東大出版会)などのご著書がある斉藤兆史氏(東京大学大学院総合文化研究科助教授)、といったまさに日本を代表するお二人の研究者をお迎えします。また、お二人のパネリストの先生、そしてフロアの参会者の方々と白熱したディスカッションを繰り広げるべく、コーディネータには、豊田昌倫先生(関西外国語大学教授)がお引き受け下さいました。

このシンポジウムを通して、大学における英語教育のイミが見えてくることを願っています。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

(研究企画委員会)